



第57回

アテネ／ギリシャ

Athens Greece

トゥキュディデスの罠

リクルート=スタディサブリ講師 村山 秀太郎

“恐怖と誤算”が招く戦争

2026年5月、習近平国家主席は北京でのトランプ大統領との首脳会談の冒頭で、「中国とアメリカは、いわゆる『トゥキュディデスの罠』を乗り越え、新しい大国関係を築くことができるのか」と問いかけた。習主席は2013年頃から一貫して「大国間には『トゥキュディデスの罠』は存在しない。誤った戦略判断がそれをつくり出す」と述べていた。

トゥキュディデスの罠とは、「新興国や挑戦国が勢力を急拡大すると、既存の覇権国の恐怖や警戒心が高まり、戦争に至りやすくなる」という国際政治学の概念で、古代ギリシアの歴史家トゥキュディデスの『戦史』をもとに、米国の政治学者グレーム・アリソンが提唱した。トゥキュディデスは、「(新興国)アテネの勢力の増

大と、それによって(覇権国)スパルタが抱いた恐怖が、(ペロポネソス)戦争を避けられないものにした」と記した。アテネは海軍力・経済力・民主政治で急成長し、スパルタはその成長を脅威と感じた。重要なのは、戦争の原因は相手の攻撃ではなく“恐怖と誤算”だったという点だ。海上帝国へ成長したアテネを恐れたスパルタが戦争を決意、結果は約27年間の長期戦となり、双方とも国力を消耗した。

世界史の5つの「罠」の事例

アリソンは、この「罠」の事例が後代の世界史には16あるという。うち、5つを挙げてみよう(右表の黄色の網掛け事例)。

1番目(#3)は、17世紀前半、**覇権国**がカトリック国のハプスブルク朝**スペイン**、**新興国**がイスラームの**オスマン帝国**という事例。現イスタンブールを都とするオスマン帝国が、1526年のモハーチの戦いでハンガリーを領有。すると、スペイン王と神聖ローマ皇帝を兼任するカルロス1世は、“弱気”になりドイツ地方の諸勢力の歓心を買うために、神聖ローマ帝国の宗教としてカトリック以外にプロテスタント(ルター派)も認めてしまった。

2番目(#5)は、17世紀の**覇権国**が**オランダ**で**新興国**が**イギリス**。3度の英蘭戦争を経て英国は海軍力で優位に立った。この戦争の近因は、共和政イングランドの為政者クロムウェルが、

